

朝顔の花七つほど咲く垣のそとよりわれを呼ぶは
誰が子ぞ

海に入りともに死なむと云ふひとをなだめてかへ
る夏の夜の月

病みあがりかなしきことを書きおこすかの君いか
に鎌倉の夏

世にそむき君にそむきてわれひとりいきどほろし
く向日葵ひげるまを植う

鎌倉の七つの谷の秋ふかし君のふるさとわれのふ
るさと

鎌倉の秋のわかれを忘るなと云ひし君まづ忘れけ
るかな

うき戀の名残りのごとき風ふきてさびしかりけり
鎌倉の秋

鎌倉はあかつき寒しひとり寝のもの思ひ寝の仇し
寝にして

もの思へば砂に文字書くならばはしもむかしながら
のならばしにして

砂のうへにいくたび書きし君が名ぞいくたび来て
は消せる潮ぞ

砂のうへに涙は落ちぬいついかにかかる悲しきこ
とを書きけむ

ただひとり寂しく浪と戯れぬたはむるべき君し
なければ

夜毎に伊豆の山火をながめつつもの思ふ子を誰と
おもふや

夜をこめて伊豆の山火は燃ゆと云ふわれも夜すが
ら君を思はむ

砂山にひとりのぼりて悲しみぬこれやむかしの戀
の墓かと

砂山にわれらがつけし足跡もむなしく消えて幾と
せか經し

冬の日はつめたくさしぬ砂山は墓のごとくにしづ
かなるかな

死なばやとふとかこちたるわが聲におどろくもの
か海を眺めて

いづれ死に誘ふはおなじなほ戀を怖るごとく海
を怖るる

うき戀のなれの果かとあざけるやわが鎌倉のひと
りずまひを

ほほ笑みて滑川邊の葦の葉の葉摺に似るとあざけ
りを聽く

露の路扇が谷にまがるときふと手觸れたる君にや
はあらぬ

誰が子ぞ由井が濱邊の宵闇に忍び泣するこゑの聽
こゆる

寂しければひとり星など數へるぬかの君の星この
君の星

鎌倉の夜は寒からむ秋のかぜわれらが戀の墓より
ぞ吹く

わが家に君來ずなれば冬がまへはやくもするや鎌
倉の里

(196)

多情多恨

薄なさけ深なさけはたいづれぞやふたりが情くら
べ見る時

君ありてわが世たのしと云ふことをふたりの人に
云ふが苦しき

(197)

秋の日のあなじゆうべに二人よりも恨めしき文
の來しかな

たはむれの戀ならなくになどてかく二人を思ふわ
が身なるらむ

秋來れば二人かたみによく泣きぬつれなしと云ひ
うらめしと云ひ

昨夜踏^マみし女とこよひ踏^ミむ君とことなる秋の夜の
草かな

身はひとつ心はふたつわが戀はその合^アひがたき理^リ
より破れむ

ふたなさけふたすぢ靡く名香のよき煙にもたとへ
けるかな

思ひ瘦せぬ多情多恨のわが身ゆゑふたりの君を思
ふ戀ゆゑ

一人は死なむと云ひぬ一人は生きむと云ひぬいか
にしてまし

むつまじく語りてゐれど何ごとを企みるらむ心
ごころに

「夜もなほ眠らず何を書きたまふ」「君と死ぬべく
書置を書く」

みな戀のかたちを變へし姿なり君を憎むも君をの
ろふも

やがてまたもとの一人にかへるらむひとり寂しく
墓にゆくらむ

おなじ世に君あることを憂しとする日の近からむ
ことを怖るる

君戀し思はずわれのかこちたるおのが言葉に胸を
刺さるる

かくならむ戀とも知らず頼みたる君をあはれむわ
れをあはれむ

君もまた過ぎ來し方かたをかへりみて悔いなげくこと
ありやあらずや

君がなさけあまりに深しわが情あまりうすしと恨
みたまへど

君は云ふかばかり思ひ思はるる戀こひに暇いとまのありと思ふや

深なさけ仇なさけより少しよし薄なさけには及びがたかり

君を見て蛇の情を持つひとと怖るるごとく云ふは誰が子ぞ

むしろわれに毒をあたへよかく云ひて泣き叫ぶ子の狂ほしきかな

死ぬばかり君を思ふと云ふ言葉いくたび云へば許したまふや

君泣けばわれもまた泣くふと見れば星も泣くやと思はれしかな

しづかなる夜なりき君がぶくれ毛をもてあそぶ程の風はあれども

秋の夜やまた泣きに來るひとのある前ぶれのごとこほろぎの鳴く

かの君に寂しき顔を見せたるが不覺のもとと知らざりしかな

秋來ればたちまち心動くらむ風の音にも雨の音にも

秋の夜はものぞなつかし夜毎ゆく銀座通りの好ありきかな

寂しさに好ありきするならばしも秋がつくりしならはしにして

人戀し灯もなつかしと夜戸出する寂しきころを秋と云ふらむ

霧に濡れてかへるたはれを死ぬばかり思ひみだれてかへるたはれを

かかる夜の霧にまぎれてたたくべき美しき灯のさす窓もがな

何ゆゑに棄てたまひしと云ふごとく秋の風來てさめざめと泣く

このままに死ねやと思ふ夜もありぬもの狂ほしき
戀のいやはて

もの妬みものうたがひに狂ほしき君をのがれて方
違へする

まこと世の戀のこころを知るものに薄なさけほど
うれしきはなし

この君はまことの涙いつはりの涙とふたつ持てる
をかしさ

人の世の旅のなかばもはや過ぎぬ戀ふたつ三つ失
ひし間に

戀ざめの寂しさも知る短夜の見果てぬ夢のはかな
さも知る

われ知らず戀の深みに落ちてゆくこの酔ごち忘
れかねつも

美しきひとにむかへばつれづれの目のたたかひも
おもしろきかな

目のいくさ終りてさびし暖爐だんろの火燃ゆる音のみし
めやかにして

あな寂し弄ぶべき火もがなと謎のごとくにたはれ
めは云ふ

石となし火となしわれを弄ぶ魔法つかひの君なり
しかな

戀知らず情知らずのかのひとは卑し首陀羅しゅだらの娘な
るべし

そのかみの戀の猛者とも思はれず懺悔の涙しどと
流せば

戀あまた葬ひて來しいやはての菩提心とは知るひ
ともなき

いくたびかかくは懺悔をしたりけむかくていくた
び人を戀ひけむ

閉されし扉かを敲く身のあぢきなさ知るやと謎のご
とく問ふひと

君に問ふ如月きつきごろの比叡ひゑおろしよりも寒きは誰の
こころぞ

あはれなる友の文かなまた戀に破れて旅にさすら
ふと云ふ

祇園の夢

かにかくに祇園は戀し寝るときも枕のしたを水の
ながるる

女紅場にせうばの提燈ていとうあかさかなしみか加茂川の水あをき
愁か

圓山の長椅子べんしに凭りてあはれにも娼婦しょうぶのあそぶ春
のゆふぐれ

つと入れば胸おしろいに肌ぬぎし君ありわれに往
ねと云ひける

大勝の女あるじがふとりたるからだのごとく暑き
夏の日

木屋町の酔へるがごとき夜のいろに見恍れて君を
忘れし子なり

簪はたまたま風にゆらめきぬ愛宕おろしの君に吹
く時

ねむたげの目のまたたきに誘はれて蛾はきたるら
し種二の膝に

白き手がつとあらはれて蠟燭の心を切るこそなま
めかしけれ

明眸もわれにやうなし抱かねばあの三榮さへあた
ひなからむ

仁丹の廣告も見ゆ橋も見ゆあまぼろしに舞姫も
見ゆ

さかづきす岡崎にすむ先生の髭なつかしと云へる
女に

おしろいは厚きが可^よかり口紅は濃きが可^よかりと云
ふは誰が子ぞ

落ちたる地獄太夫が濡髪か千鳥が置きてゆきし柳
か

病みあがり吉彌がひとり河岸に出で河原蓬に見入
るあはれさ

君とゆく河原づたひぞあもしろき都ホテルの灯と
もし頃を

南座の幟の音がころよくわが枕までひびき來る
とき

鳥邊野に夜半にゆかむと云ふは誰ささやきかはす
舞姫のなか

蓬の香水の香さては紅^{こう}粉^{かん}の香とさまざまにもの
ほふ家

先斗町の遊びの家の灯のうつる水なつかしや君と
ながむる

香煎のほひしづかにただよへる祇園はかなし一
人歩めば

ゆるやかにだらりの帯のうごく時はれがましやと
君の云ふ時

かなしみを棄てむと京に來しものをあはれやさら
に得て歸りける

ゆるゑ知らず涙ながれぬ閉ざされし歌舞練場のまへ
を過ぐれば

叡山の荒法師とも云ひつべき人と遊びていなづま
を見る

からわたり河原に來よと第一の舞姫を呼ぶ第二の
舞姫

清水の陶器の舗の看板の取り入れどきを君とかへ
りぬ

舞扇かかるうれしきそよかぜをわれに送らむため
にひらくや

この家を眞葛が原にかたどりて遊ばむと云ふ子も
ありしかな

加茂川の水はあさかりかくてまたかの舞姫は情あ
さかり

われをかし祇園に入りしその日より晝なき人とな
りにけらしな

巴里の風^{とち}椽を吹くにもまがふべし祇園の風は青柳
を吹く

舞扇ひらくと見たる束の間のそのつかのまをよろ
こぶものか

一方のおあさに聴きしはなしよな身につまざる
戀がたりよな

酒に酔ひ舞姫に酔ひ正體もなやとおあさは笑ひけ
るかな

かより合ひ轉まわび合ひたる雜魚まじり寢ねびと遊あそび倦うきたる
あけがたの月

舞ま姫ぎの木履こきの音ねしんしんと更かけたる秋あきの夜半よるに聽き
こゆる

口紅くちびるはあまりに濃こかり舞ま姫ぎのそのくちびるは吸くふ
よしもなし

わかうどが祇園ぎんの秋あきの夜よの夢ゆめはいと覺おめやすきも
のとかは知る

かなしみは蓬よもぎの香かほよりきたるなりおれんなゆきそ

加茂かものの河原かはらに

南座なんざの顔見世かみせちかし澤さわ瀉しゃ屋や來くとうれしげに云いふは
誰たれが子こぞ

加茂川かものがわの水みづをながめてもの思おもふさすらひびとにも
のな問とひそね

かなしみに身みも世よもあらぬこちして繩な手ていそげ
ば降ふる時雨ときりかな

秋風にだらりの帯のうごく夢見しより京の旅をおもひぬ

加茂川の蓬の香をばわが閨にはるばる送る秋かぜもがな

ああ祇園わが思ふ子の噂などつたへて春の風は吹くらむ

まづわれを酔はしめたるは誰が子ぞ京の七夜の祇園風流

伽羅の香がむせぶばかりににほひ來る祇園の街のゆきずりもよし

ゆく春の祇園はかなし舞姫が稽古がへりのうしろ姿も

雨降りて祇園の土をむらさきに染むるも春の名残りなるかな

ただひとり果敢なきことを思ひつつ祇園街ゆく旅ごろもかな

あでやかに君がつかへる扇より祇園月夜となり
けらしな

祇園街そぞろありきに拾ひたる棄扇にも秋をおぼ
えぬ

狼藉と祇園の秋を吹きみだす比叡おろしよ鞍馬お
ろしよ

うつくしき祇園言葉に聴き惚れてかへるを忘れわ
れやありけむ

ただひとり都踊りの樂屋よりぬけ出でて來し君を
こそ思へ

わがこころ解けつもつれつするものかだらりの帶
の動くまにまに

にぎやかに都踊りの幕下りしのちの寂しさ誰にか
たらむ

一力の縁に燕がはこび來し金泥に似し京の土か
な

世之助が大原おぼらの里の雑魚寝よりわれの雑魚寝はな
まめかしけれ

夏の夜のあからさまなる雑魚寝さへあさましから
ず君の戀しき

加茂川の水にうつれば提燈もあなやあやうく流る
るものか

夜もすがら何を恨むや歎けるや加茂川の水かなし
げに泣く

加茂川に夕立すなり寝て聽けば雨も鼓を打つかと
ぞ思ふ

ただひとり群をはなれて石ひろふ舞姫かなし加茂
川の秋

秋ふかく木がらしに似る風ふけばはやくも瘦する
加茂川の水

身に染しみぬ京の夜寒と加茂川の千鳥のこゑと君が
なさけと

河原よりわが名を呼びてかくれたる蓬のなかの紅
き帯かな

寂しさに加茂の河原をさまよひて蓬を踏めば君が
香ぞする

蟲の音にふと誘はれし舞姫は河原にゆきてゆくゑ
知らずも

木屋町へ四條をいそぐ文づかひ苧姆おちよをぬらす春の
雨かな

舞姫があらひのすさびの縁むすび仇ともならば悲し
からまし

祇園會ぎおんのあとの寂しさしよんぼりとゆく舞姫もあ
はれなるかな

寺町のしやべりのなるが娘としてこの舞姫のよく語
ること

うつくしき玉蟲いろの唇がかすかに動きものをこ
そ云へ

帯重し袂重しと云ふ君の臉もおもくなりにつけらし
な

鞍馬より天狗風ふく夜もあらば抱かれて寝むと君
は云ふかや

もの云はぬ舞姫を見て春の夜の金の屏風の精とお
もひし

三四人そろひて入り來舞ごろも光琳波の金襖か
な

秋は來ぬ京の夜いかにはしけやしおれんいかにと
思はるるかな

おとめとは祇園の春の夜の精櫻の精につけし名な
らむ

はぐれなばいかにせましと舞姫の云ふ鳥邊山山深
みかも

清水の舞臺を下りし蝶ふたつやがて二人の舞姫と
なる

何ごとのねがひか知らね清水に朝詣あさまうですも夕ゆふまうで
すも

叱られて悲しきときは圓山に泣きにゆくなりをさ
な舞姫

おとろへし舞姫あはれ圓山に來ては落花を踏みて
かへりぬ

誰が戀か床ゆかより床へかたらるる今年の夏の噂なる
らむ

舞姫に笑はれながら酒を飲む丹波の客も床ゆかにすず
みぬ

秋風がまばらになりし床ゆかを吹く頃ともならば君と
わかれむ

秋江しゅうかうが閨の怨みを書くときを秋と云ふらむ京の仇
し寢

あだ名して樊噲はんかいと呼ぶ極道もしみじみとしてあそ
ぶ秋の夜

雑魚寝して炬燵ふたつを置かすれば西山に似る北
山に似る

鐘の音は智恩院ならむなど云ひて又寝するなり雑
魚寝のひとは

舞姫にこがれて瘦せし黒谷の鐘樓守がつける鐘か
な

京さむし鐘の音さへ氷るやと云ひつつ冷えし酒を
すすりぬ

おもひでのなかにひときは眩ゆかるおもひでとし
て京を思ひぬ

京と云へば遊び疲れしわかうどの姿も見ゆる春の
雨かな

島原の角屋の塵はなつかしや元祿の塵享保の
塵

菜の花の花のさかりや傾城のたましひのごと蝶ひ
とつ來る

その女東寺の傍に鼓など教へゐたるがいづちゆき
けむ

太秦の鬼のやうなる心よななさを知らぬ京の少
女は

西陣に錦の布を織る音す春の夜すがらきりはた
てう

嵐山來は來つれども君あらぬこの寂しさをいかに
すべけむ

うつなき彌生の京の遊びにも倦きてわが來し杜
鵲亭かな

嗟峨に來て思ふは遠き君のこと秋の女と呼ぶひと
のこと

京中の寂しさを取りあつめても嗟峨の秋には及ば
ざりきな

落柿舎に來てふと思ふ鎌倉の虚子の庵は何と云ふ
名ぞ

嗟峨野ゆき薄のなかにはぐれたる君にやはあらぬ
われにやはあらぬ

しめやかに時雨の過ぐる音聴こゆ嗟峨はもさびし
君とゆけども

舞姫とともに分くれば荇萱もいとなまめきて見え
にけるかな

月夜よし寝じなと云ひしひとのため宇治の一夜は
忘れがたかり

別れ來し君が身のうへしのびつつ宇治の河原にお
もひ草摘む

われはまづ愛宕おろしの寒さよとかへり來し子の
手を取りにける

ゆふぐれに京より着きし舟のなかいささか知りし
舞姫も見ゆ

世を厭ひ世をいきどほり世をうらみ君と住まばや
深草の里

次の間に君の脱ぎたる舞ごろもありてなまめく夜
半なりしかな

冬の夜の凍てし鼓をあぶる手の瘦せしもあはれ誰
を戀ふらむ

うつくしき僧とをさなき舞姫の戀がたりなど悲し
かりにし

いたいけのわが舞姫のものおもひ簪も重くおもは
れしかな

寒聲や四條五條の橋の上の夜の霜いかに君のゆく
とき

打たるるもよしや玉手に抱かるる君が鼓とならま
しものを

踏まるるもよしや悲しき香を立つる河原蓬となら
ましものを

舞ごろも取り出しては泣くと云ふ病みたるひとの
文もとどきぬ

七人の舞姫と寝る雑魚寝よりまざる奢りはあらし
とぞ思ふ

西の京舞妓ころしの噂さへいつしか消えて夏とな
りぬる

あはれなる身の上ばなしかたるひとありて果敢な
し木屋町の床

智恩院の鐘に無常の風が吹くだらりの帯にそよか
ぜが吹く

はかな言云ふ舞姫の手にありて螢のひかりいよよ
青し

夏瘦か戀のやつれか昨日今日わが舞姫は何のおと
ろへ

友禪の袂がつくるそよかぜを祇園おろしとたはむ
れに呼ぶ

人や見む比叡おろしや寒からむ障子しめむと云ひ
にけらずや

水瘦せて冬のやうなる月あかり加茂川月夜泣くは
誰が子ぞ

祭過ぎ大文字過ぎ夏もゆくいとあわただし京の暦
は

京戀しそれもひとりの美しきなほ忘れぬ子ゆゑ
なるらむ

加茂川をゆく水よりもはかなしやその日その日の
舞姫の戀

舞姫のくちびる寒し加茂川のつめたき風に臙脂凍
りて

吐息つくことなどいつか覺えたるこの舞姫のいぢ
らしきかな

西の京は春まだ早く叡山に雲のかかれば雪となる
らし

圓山に灯のつき初むるたそがれの京のけしきも戀
しきものか

もろともに葵祭を見にゆかむ薄約束の君なりしか
な

寄せ書にわが思ふ子の名もありて胸をどるなり京
の繪葉書

寂しければ大徳寺にもゆきて見つ時ならぬ雪降る
がまにまに

うれしきは君にもあらず遠州がこのみの石の置き
どころかな

宵のくちただひとときの逢瀬だにうれしきものか
京に來ぬれば

秋さむし金のこぼるる舞扇だらりの帯のうしろつ
きなど

おれんとはかの美しきひとの名かわが片戀のうき
ひとの名か

富菊の涙や香をば立てにけむ河原蓬の夜半のほ
ひよ

富菊はわがかなしみを知るごとくうるむ瞳を上げ
にけるかな

あかつきの河原蓬に置く露とゆうべの星といづれ
悲しき

舞姫の涙を誘ふ加茂川の蓬の香をばにくみけるか
な

はるばると京を思へばほのかなる蓬の香さへ夢に
入るかな

舞姫はいとあはれなる夢がたりはかなげにして占
へと云ふ

こころよく河風ふきぬ舞姫もうすもの着れば翡翠
に似る

短夜のみぢかき戀をなげくごと河風吹きぬ木屋町
の床

冬の夜の加茂の河風よりもなほ寒きは君がらすな
さけかな

床涼みあらぬ浮名を立てられてまたひと夏を過す
べき身か

舞姫の秘めたる戀のあらはるごとく寂しく酒中
花のさく

上加茂の水無月能もいつか過ぎ君と見るべき京の
夏來ぬ

夏は來ぬ涼しきいろのもの戀し圓山の灯よ君がひ
とみよ

なつかしき河原蓬よあるときはおもひで草とたは
むれに呼ぶ

一方のはなやかさよりこの秋はかの落柿舎の寂し
さにゐむ

比叡おろし今日もまた吹く舞姫の戀やぶれよと云
ふがごとくに

圓山の雪といづれか白からむわが舞姫のもしろい
のいろ

小夜ふけて化粧の水をこぼすとき雪降り出でぬ加
茂川の冬

加茂川の水細うして旅心地いややるせなくなりま
さるかな

秋江^{しゅうかう}が戀ふる女のみだれ髪にも似るものか京の柳
は

たとふれば君が心のさむさにも似たりと云はむ京
の夜寒を

はしけやし祇園まつりの山鉾の阿蘭陀^{おらんた}布^{ぬい}に似たる
汝が帯

黒谷の法然に戀なきはよしかの君に戀なきははか
なし

舞姫のだらりの帯にあるときは矢車草もなつかし
きかな

さかづきの酒冷え君が心冷え酔ひがたきかな京の
春寒

ややありて寂しさ湧きぬ今もなほかはらぬ加茂の
水の音かな

洛外の菜の花畑の花ざかり二人はぐれて往きてか
へらじ

かたはらに君によく似し歌麿の繪がねむりゐる京
の閨かな

いぢらしき舞姫なるよ酒中花を見る目はやくもう
るみけらずや

比叡おろし天狗礫の降るなかを舞姫のゆく山のぼ
りかな

ふと見れば大文字の火はかなしげに映りてありき
君が瞳に

妙法も弘誓の船もみな消えていよいよ暗き京の空
かな

宇治川のくだり船にてあひし雨その雨戀し君をお
もへば

鳥邊野は戀の二人が死にどころやがてわれらが死
にどころかな

夏まつり神輿あらひのにぎはひのなかに見出でし
君にやはあらぬ

雨ほそく叡山苔をぬらしぬ君とながむる木屋町
の庭

木屋町の夜の話のたねも盡き月落ち方がたとなりにつ
るかな

舞姫のために筑紫の山持が七つの山を賣ると云ふ
秋

いささかは京に未練の残れるも戀しきひとのあれ
ばなるらむ

ただふたりそと抜け出でて來しからに圓山月夜忘
れかねつも

加茂川にうす雪降れば小夜千鳥水にこそ啼け石に
こそ啼け

わが胸の底をながるるかなしみに似て流るるや加
茂川の水

君にわかれ祇園にわかれなつかしき京に別るる朝
の雪かな

10

馬樂・紫朝・小せん

馬道の馬樂の家へゆく路次に夕月さすとかなしき
ものか

いやさらに寂しかるらむ馬道の馬樂の家の春も暮
るれば

春來ともうつくしき夜のつづくとも馬樂酔はずば
わが世寂しき

世を棄てて馬樂いしくもありけるよ憂しと思ふは
汝なればかりかは

秋の風馬樂ふたび狂へりと云ふ噂などつたへ來
るかな

颯然と高座にのぼる汝なれを見てあなわれかもとうた
がふも吾

馬樂見て云ふべからざるかなしみを感ず秋の夜更
けがたきかも

ああ馬樂この悪しき世に生くべくばむしろ狂ひて
あれと思ひぬ

わが嫌ふおほくのひとを罵ると馬樂の口をからま
しものを

うつらうつらむかし馬樂の家ありしところまで來
ぬ秋の夜半に

狂ほしき馬樂のころやがてこのもの狂ほしきわ
がころかな

たまきはる命ふたびよみがへれ馬樂の命いとほ
しきかも

蛇どろの茂兵衛と云へる男のものがたり馬樂はしたり
その夜忘れず

馬樂はもひとり知りけむうつし世に煩惱ぼんのう地獄じごくあり
と云ふこと

氣のふれし落語はなし家かひとりありにけり命死ぬまで酒
飲みにけり

浅草や観音堂に月させど馬樂を見ざる三年なるか
な

ありし世のありのことごとしのびつつ馬樂地藏に
酒たてまつる

煩惱のために馬樂も狂ひけり人を戀ふれば苦しか
りけむ

蠟燭を細くともせし枕もと馬樂病む夜のまぼろし
も見ゆ

氣ちがひになりし落語家ありけりと語るも秋と思
はれしかな

ああ馬樂汝とともに世をのしりしその夜思へば
はるかなるかも

淺草は秋公孫樹葉のちるところむかし馬樂の住み
けるところ

氣ちがひになりし馬樂の悲しさはすなはち今日の
われの悲しさ

はるばると時は流れてゆくものか馬樂の死より三
年經にけり

白玉と云へる遊女のはなしなどしつつ馬樂はこぼ
ろぎを聽く

三日月は黄楊の櫛より細かりき馬樂を訪ひし夜の
おもひで

いたづらに酔ふてある間に馬樂忌はまためぐり來
ぬ寂しきかなや

左平次のものがたりなど聞きし夜もやうやく遠く
馬樂忌は來ぬ

酒さむし馬樂が呉れし杯は淺草の夜に見し月に似
る

彌太郎忌ちかしと云ひて酒汲めば杯を見ても寂し
さの湧く

雪降らば馬樂地藏も寒からむ朝ふと思ひたるはこ
のこと

雪降りぬまづ杯に満たせるは馬樂地藏にたてまつ
る酒

霜しろく馬樂地藏のうへに置くころともなりぬ酒
に走らむ

世を厭ふところは深し馬樂の忌やうやく近くなる
がまにまに

三日月を見ても馬樂を思ふほど世を拗ねびととな
りしわれかな

狂ほしき心となりぬ目閉づれば馬樂の姿目にうか
び来る

ああ紫朝しつうこの世を厭ふ人びとのためにうたひてあ
りや夜毎に

世を厭ひかなしむまににあやぶみぬ紫朝うたはぬ
日もや来るかと

秋の夜に紫朝を聴けばしみじみとよその戀にも泣
かれぬるかな

われに戀汝なれに新内かくて世はうつくしからむ江戸
のごとくに

盲目の紫朝のこゑもさびしかり寄席よせの木戸吹く秋
のかぜかも

ああ紫朝この厭ふべき世を見ざる汝なが盲目もうきをうら
やめる身は

雪降ればあはれ小せんせんの脊髓せきずいのいたみいかにと思
はるるかな

盲目の小せんが發句を案じゐる置炬燵より悲しきはなし

もの云はずただ冷やかに笑ひたり小せんよ何をのろひ嘲ける

盲目の目はいづこをば見つむらむ小せんのみへの夜の壁かな

めしひなれば雨の音のみ聴きながら小せんはひとりもの思ひ居り

雨いつか雪とかはりぬしみじみと小せんはものを思へるかなや

雪降れば白妙ならむかく云ひて見えぬ目上ぐる小せん悲しも

盲目の小せんは悲し見えぬ目の見えぬを知れど雪を見むとす

人の世にいきどほろしきことありて小せん酒呼ぶ夜もありしかな

雲降るゆうべとなればわが小せん腹食ひたしと云
ひにけらずや

かなしげに小せんがよみし馬樂忌の手向けの句よ
り秋の風ふく

見えぬ目に何をもとむる何を見る小せんは悲し盲
目にして

しみじみと悲しき顔をなせるゆゑわれまた云はず
あはれ小せんと

旅 情

ものなべて身に染むゆうべわが船の笛のひびきも
耳に残りぬ (以下十八首紀伊の旅にて)

をたけびは海見てあげしよろこびかはた悲しみを
消さむよすがか

眺むれど船のかげ見ず一條の太き帆綱ぞおほぞら
を切る

海の戀身ふるふ時と浪を見ぬ君をおもへるわかき
心に

空と海たぐひもあらぬま空きもの二つながめて心な
ごみぬ

伊い佐さ奈な神かみすこやかにして今日もあり千年いまだ老
いざる海に

われのぼるはじめて地を踏みし子のごとく陸りなる
ものを怖れて

岩裂けて黄泉の扉をあらはしぬ思ひかけざる人の
ふためき

海を越す姿たちまちかほ翡翠せきにかはりぬと云ふ神なら
ねども

山はいまこの小さなる人の子を蟻あなごの類と見ておも
へらく

このゆうべ山はつぶやく何ものぞわがあたま蹠くをうたふ
てゆくは

海のこゑかなしくわれに語らくは君を思ふ子この
國になし

その眞晝柑子の蔭に見し夢のなかの少女をいまだ
忘れず

われ迷ふ橘の森ひろうして海邊山邊の方もわか
く

われは練る昨日は都大路また今日は柑子のかんば
しき道

山に問ふ山は答へず山をゆき山のころをいまだ
さとらず

常世の子現世の子と會ひぬべきところと高き山し
づかなる

善ならぬはた悪ならぬなかほどのことを好まず旅
にしあれど

山荒く海きほへども少女らはうつくしと云ふ筑紫
よく見む (以下十五首九州の旅にて)

旅ゆくかあるは戀より遁れしか知らずうつけて海
にうかびぬ

✓ 旅ゆけど何の思ひか身にあらむただいたづらに山
見海見る

漏刻の水落ちつくす寂しさをこの夜おぼえつ夏の
旅寝に

遠つ代かはた近つ代かわかぬ日のなかに住む子は
筑紫路に入る

旅ゆけば唐棣の衣もおもしろとある夜かづきて君
がり通ふ

海のかぜ葡萄のほひ唇のおとをおもへばこころ
騒ぎぬ

海的路わかぬばかりに霧ふりぬ君の聲するかたへ
船遣る

あたらしき船唄かなし松の葉の琉球組の唄のごと
くに

南國は閻浮提金の空のいろかかるゆうべに君をい
だかむ

ああその夜無花果の葉のあなたより覗きし星をえ
こそ忘れぬ

遠びとのほのに息づく時なるや風はかすかに山を
訪ふ

はるばるとさすらひ來れば鷗さへ善知鳥のごとく
かなしげに鳴く

つれなくも稻佐少女はことさらに酸き木の實をわ
れに興ふる

君に似し天草島のたをやめが髪おもしろし總角に
して

うつし身のこの蹠のつくところ筑紫の土はなつか
しきかな (以下十八首ふたたび九州の旅にて)

遠つ代のものがたりめく山ありて悲しきところ筑
紫よく見む

ただありのあはつけ人の情さへ忘れずと云ふか筑
紫少女は

筑紫なる阿蘇のけむりの絶ゆるとも變らじと云ふ
消息を書く

はしけやし少女にまことありと聽くうれしきとこ
ろ筑紫よく見む

いにしへの防人^{さきもり}たちも筑紫路に來て孀^{つばな}を戀ふ歌を
うたへり

これやこの流離の旅にあらねども筑紫と云へばは
るかなるかも

短か世の旅のなかなる旅にして短き命惜しまれし
かな

現身は筑紫にあれどたましひは君をもとめてゆく
ゑ知らずも

苦しければ旅にも出でぬ筑紫路はわがかなしみの
棄てどころかな

ひとり来て筑紫の土を踏むことがすでにかなしき
ことと知りさや

はるばると筑紫に来つと文遣りぬかのいにしへの
防人のごと

心寄れば情ありげに聴こゆるよ筑紫少女が筑紫な
まりも

かにかくに君は遠しと思へばかうたた寂しき旅も
するかな

いたづらにわれたはれをの聲高しいきどほろしく
旅に死ぬべき

不知火の筑紫の海の遠鳴もなつかしければはるば
ると來つ

秋來れば旅の歌などきれぎれに胸にうかびて筑紫
戀しき

筑紫なる多々羅濱邊に風吹きてわが足跡も消えに
けらしも

片時も忘れぬひとによく似たる君をおもへば伊勢
は戀しき (以下六首伊勢の旅にて)

鈴の屋の鈴はかしこしわが家の戀の文がらかしこ
きがごと

七人の女とともに海を見ぬ鳥羽の港の夏のあけが
た

わがまへに女を乗せし船ありてなまめくものか鳥
羽の夕立

油屋のお紺が棄てし落髪も古りにけらしな古市の
町

君が家の屋根の草など思はする澤瀉太夫の屋根の
草かな

あはれなる秋の女とわかれ來し旅ゆゑ身ゆゑ涙落
ちにき (以下十六首大阪の旅にて)

大阪に着きてはじめて見し空を元祿の世の空とお
もひぬ

秋の夜の道頓堀のにぎはひのなかにあれどもなく
さますけり

たそがれの角座の幟はたはたと吾を紅燈の街にさ
そへり

ただひと夜いとうつくしく西鶴に書かれむほどの
よきこともがな

かなしげに水を見つむるひとありて南地の夜は更
けがたきかも

富田屋の文づかひする下男雨に濡れつつ街をはし
るも

かにかくに浪華育ちのやさしさをわが忘れぬ君
に見るかな

秋の夜のこのうつくしき空を見て船場少女は何を
おもふや

君が文座摩の御祓のあくる日と書きし日附もなつ
かしきかな

麻の葉の帯はそぞろになつかしや浪花をどりを見るにつけても

小夜更けて角の芝居の果太鼓かなしく水にひびきて來るとき

われにまた悲しみひとつ教へたる曾根崎夜話のなかの君かな

發句つくり遊魚の家のもしびも水にうつりぬ柳がくれに

橋七つ越えてここまで會ひに來る身をあはれめと云ふは誰が子ぞ

筆取りて達摩大師の繪を描きぬ八千代が春の夜のたはむれ

長崎の茂吉はうれし會へばまづ腎じんの藥ををしへけるかも (以下十二首長崎の旅にて)

病みあがりなれど茂吉は酒飲みてしばしば舌を吐きにけるかも

風揚げの猛者と聽こえて逞ましやわが長崎の君の
兄者人

天竺の消息よりもはかなしや旅にして見る君が消
息

寂しさの極まるところしら玉の女身のほかに欲る
ものもなき

ぎやまんの大杯を手を取れば寛濶どころおさへか
ねつも

眇目の支那人ひとりゐてまづわれに金を出しねと
云ひにけらずや

海越えて往なむ日本も住み憂しとなげく子を見ぬ
長崎にして

なつかしやそのころ読みし長崎のことを書きたる
荷風が文も

白秋とともにとまりし天草の大江の宿は伴天連の
宿

不許複製



昭和三年五月十日 印刷
昭和三年五月廿五日 發行

【定價一圓七十錢】

著者 吉井 勇

發行者 飯尾謙藏

東京市小石川區江戸町十八番地

東京市小石川區江戸町十八番地
發行所 交蘭社

芝口座東京四〇二七九番

印刷者 笠原知勝

東京市牛込區靈管町一番地

【行印所刷印原萩】

そのむかし君とわかれし夜のさまに鷗鳴くなり長
崎の海

長崎の春は來るらしめづらしき阿蘭陀皿の花模様
より

交蘭社發行

〔總圖書目錄三錢切〕
手封入申込次第送呈

西條八十氏著

抒情集

彼

女

定價金一圓九十錢
送料金十四錢

落谷虹兒氏著

畫譜

銀

砂

の

汀

定價金一圓三十錢
送料金十二錢

吉屋信子氏著

自一卷
至五卷

花

物

語

語

定價各一圓五十錢
送料各十二錢

西條八十氏著

感想
隨筆

丘

に

想

ふ

定價金一圓六十錢
送料金十二錢

生田春月氏著

感想集

草

上

靜

思

定價金一圓三十錢
送料金十二錢

西條八十
横山青娥

兩氏編

詩

歌

要

語

辭典
定價金一圓二十錢
送料金十二錢

加藤長江氏編

音

樂

常

識

辭

典
定價金一圓三十錢
送料金十二錢

▽吉井 勇氏著

——中形版總羽二重美裝函入——

自自
釋釋

戀
ぐ
さ

定價金一圓四十錢
送料金十二錢

▽或は榮華の蒼に、或は人の世の哀別離苦に、または祇園の夜を舞子と戯れて憂苦を感むる優婉の短歌と典雅なる自釋散文を以てせる近來の好著。

▽吉井 勇氏著

——四六版布裝堅美函入——

新釋
百人一首夜話

定價金一圓五十錢
送料金十四錢

▽百人一首の各歌の解釋は勿論のこと、各作家に就いてその閱歷、生涯逸話等面白く趣味深く評釋と研究とを兼ねた良書である。

▽中西悟堂氏著 金田一京助氏序

——四六版洋布函入——

啄木の詩歌と其一生

定價金一圓五十錢
送料金十四錢

▽歳僅かに二十七歳にして早逝せる天才石川啄木。悲痛、慘苦の生活の中から珠玉の如き詩歌を多く示せる啄木の生涯とその作品は文學を語るものゝ知つて置かねばならぬ一事である。

582
8

▽中原綾子氏著 — 四六版木版美裝函入 —

歌集 深淵

定價金一圓四十錢
送料金十二錢

▽華麗奔放の情熱を以て表現せる最近數年の製作より選收せる優婉の短歌一千首、一誦何人をも魅了せずには置かぬであらう稀れに見る閨秀歌人の良書。

▽太白社編 — 四六版背緋朱子極美函入 —

現代名家 女流短歌集

定價金一圓四十錢
送料金十二錢

▽九條武子
▽柳原燐子
▽北見志保子氏著 — 四六版木版刷極美本函入 —
▽與謝野晶子
▽若山喜志子
▽中原綾子
▽茅野雅子
▽原阿佐緒
▽杉浦翠子
▽今井邦子
▽四賀光子
▽岡本かの子
▽三ヶ島霞子

歌集 月光

定價金一圓五十錢
送料金十二錢

▽絶えざる努力と精進によつて、自然人生の實用を深くも體得せる著者が、

東京市小石川區 交蘭社發行 振替口座 四〇二七九

